



女体化症

かか
に罹った

水泳部 部長

TSF

水谷ーっ！
さっさとプール
譲りなさいよ！

ああ？
女子部の練習時間なんて
少なくていいだろ



くすくす…
水谷『ちゃん』、
女子用水着
似合ってるわよ

そうそう
似合ってる似合ってる

あの

その

せっかくだから
男子部に練習時間の
交渉しにいったよ

名案！
そのでっかいムネで
色目使ったらば
なんとかなるでしょ

くすくす！

たぶら

男子水泳部の部長だった俺は
自慢じゃないが結構人気だったと思う

水泳の実力もあり、
好きな事で注目を
集められるのが快感だった。

今年の夏ぐらいから
だったろうか

何かがおかし
なり始めたのは

水谷なんか
おっぱい
大きくねえか…?

は？
気のせいだろ

女体化症ですね

ここまで進行していると
女性として生活し始めた方が…

は!!

じよ、女性として生活って…
いつ頃元に戻るんですか？

お気の毒ですが…

「幸い、運動能力などは
通常の女性程度にはあるため
部活動などの今までの趣味・生活は
問題なく続けられますよ」

ニューハーフ？

なんか病気
だったんだって

俺いまの
水谷なら
やれるかも

男子サイテー！

ウソー
水谷君のこ
好きだったのに

どこが幸いだ、と叫んでやりたかったが
そんな事をして現実に
変わるワケでもなく。

俺の、女としての生活は
こうしてはじまってしまった。

なってしまったものは仕方がない。
女子水泳部の部長に頼み込み、
女子部員として泳ぎは
続けられるようになった。

あのさ…

これ、本当に着なきゃ
いけないのか？

あつたりまえでしようが
上裸で泳ぐつもり？

…っていうかさ
アンタその下着男物だよな…？

いやっ…別にいいじゃん
下着なんてどうだって

外ではやめときな…？
ヘンな目で見られるよ

それはおいおい直すとして
今はまあとりあえず
水着に着替えなよ

う…
わかったよ…

そういうものののだろうか。
女子の都合や文化は
気にしたことが無かったからか
全然わからない。

諦めて、買ったばかりの
女子用水着に足を通していく。

ぎゅるる

しゅるる

肩紐に腕を通す。
ぎゅちりと身体全体が
しめつけられている感触に
どうしても慣れない。
これから毎日この水着を
着なきゃいけないのか…

たぷっ

ふかっ♡

ちゃんとムネの位置も
調整して…そうそう

これキツくないか？
なんかヘンじゃない？

ぎゅち…っ

ううん、ちゃんと似合ってる

似合っ…
それもなんかやだな…

びゅちりとした生地が
股間にフィットする。
男の時には無かった感覚。
以前は当たらなかった筈の所に布が
あてがわれており、恥ずかしさに
身を隠してしまいたくなる。

よし！
ちゃんと着れたね

着てみたら結構
しっくりくるでしょ？

鏡に映し出された俺は
女の姿で、女物の水着を
着ている。

顔が熱い。
この場から逃げ出してしまいたい。



さっすが元・男子水泳部部长

水着もサマになってるし
これなら何の心配もなさそうね

あ、ああ……

女子部の部長の言葉も
どこか上滑りしていくようで

どこか現実味のない
鏡に映った自分のカラダを触り、
ソレが本当に自分自身の
肉体なのだと確かめた。



女子水泳部に
正式入部出来た俺は
周囲の視線を感じながら、
それでもどうか
頑張ろうと心に決めた。

元男子水泳部部長の
水谷だ…です？
よ、よろしくお願いしやす…

緊張してる！
かわいい

照れてる照れてる

……そして、話は冒頭に戻る。
この女子部でうまくやって
いかなければならない以上、
ここで変に反発するのは得策ではない。



まあ練習時間の交渉を
しに行く位いいさ

あいつらも俺の
言う事なら聞くだろう

こういう事は
さっさと
済ますに限る



着替える時はどうしたって
自分の身体を意識せざるを得ない

水着に押さえ付けられていた
自分の胸が放り出されて
眼下で踊る

手早く
シャワーを浴びて
服を着てしまおう

たっ
たっ



しかし……
『でっかいムネで色目を使う』か。

自分が男だった頃、
女子水泳部の誰かに
言ってしまったって、
いたような記憶がある。

ずきりと刺すような
後悔をおぼえ、
ぎゅっと胸を掴んだ。

男にもし戻れたら
そういう事は言わない
人間であろう。



???

愛撫されたかのような
甘い刺激が身体全体に
じんわり広がった。



シャワーを浴びるために個室に入る。
うちの学校は水泳に力を入れており、
個室に分かれた温水シャワー設備もその一つだ。



普段ならひと泳ぎした後で身体を洗い流すのは
最高で、部活の後の楽しみだったが今のこの状況では……

鏡の曇りが消えていき、自分の身体が露わになる。
双丘のついた上半身。華奢な腰。
じっと見つめてくる、鏡の向こうの自分の瞳を見つめ返す。



「(こんなの自分じゃない...)」
「(いつかきつと戻れる)」
そう思おうとするが、息をするたび微動する胸に
思考を乱されて考えがまとまらない。

こんなに大きな胸をぶらさげている
気恥ずかしさで顔が熱くなる。
本来男ならばついてる筈のない乳房。
すうっ、と朱に染まった顔を見て、
鏡に映るこの女は紛れもなく自分自身なのだ実感した。



現実を直視させられるのは嫌な筈なのに、
鏡があるといついても自分を映して見てしまおう。
もしかして戻れているかも知れないと
無駄な期待を抱きながら。

そつと腕を動かし、胸に手を添えた。
当然、鏡の中の自分も同じ動きをしている。
腕の内側に触れる乳房がやわらかい。



冷や汗が噴き出る。
これが俺の身体……？
どう見ても男性のものには見えない上半身。
たわわに実った巨大な乳房。
肩にあたるサラサラした質感の髪。

これは何かの悪い夢だ。

いつもの現実逃避。

夢なら気付けばどうとでもなる筈で、
目覚める事だって出来る。

深層意識ではこうなる事を望んでいたから
こんな夢を見た等と、どこその精神科医は
言うかもしれないが……

間違いなく今の自分は
元の姿に戻りたがっていると断言できる。

もういい。充分だ。もう目を覚まさせてくれ。



肌に触れる空気の流れも、
小さく漏れ出る声も。
鼻にツンと香る匂いの感じ方までもが
「これは夢ではない」と自分に突きつけてくる。



現実には自分の姿が変わってしまっているという
事実を受け入れられない。受け入れたくない。

身体をいくら洗い流しても、
男だった頃の自分に戻れる筈もなく。

触れた場所が自分自身の
身体の一部であるという感覚が
かえってくるだけだった。



カラダが変わってしまった事で
こぼれおちていく自分の
存在意義にしがみついて。

前の自分と今の自分を比べる度に
失ったモノ、出来なくなった事を
意識させられて。

水泳をしなくなった自分に
価値はあるのか。
二度と自分を見てもらえなく
なるのではないか。
毎日怯えながら暮らしている。



そうやって今の自分で妥協して、
この生活に慣れていって。
次第に元の自分が、男であった自分が
積み上げてきたモノが、自分自身が
すべて崩れ、いずれ消えてしまうのではないか。



そう思うとたまらなく怖い。
誰かに自分を見ていて欲しい。
今の自分でも良いと認めて欲しい。

変わってしまったカラダに
閉じ込められた心が叫び続ける。





結局流されて
やる事になってしまった

まあいい
一度だけ。
一回だけだ。

こんな事をして
男に戻れなくなる事も
きっと無いだろう



ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡

んちや♡

んちや♡

ねろ♡

んちや♡

ドキ♡

わぁ♡



わぁ♡

「おみ……上手いじゃん！
やっぱ元男だとうやったら
気持ちいいかとか判るんだな」
「ふるへえ」

れろっ

れろっ

ふにっ♡

ドキドキ
ドキドキ

本当にうるさい。

さっさと出して練習時間調整の許可を

してくれるだけでいいのに、行為を始めた時から

「可愛いぞ」だの「舌使い上手いな」だの褒めたり

頭をなでたりしてくる。そんなの全然うれしくない。



褒められる度、撫でられる度なんだかこそばゆいような
気持ちになり、もっと気持ちよくなって欲しくなる。

ちゅぽっ♡

んぢゅっ♡

男のモノなんてしゃぶったり
舐めたりするのに抵抗があるにはあった。

コイツの体臭が特別なのか自分の体質が変わったのか
定かでは無いが、鼻腔に満たされている香りは結構癖になるし……
こうして舐めている今は、正直悪くない気持ちで満たされている。

「よし……充分濡らして貰ったな。」

「ありがとう。そろそろ入れてもいいか？」

「えっ!？」



そう言われるや否や、
肩を軽く押されて俺はマットの上に転がされた。
「お、おい冗談だろ？何するつもり…」
「わかっくんたろ？」
そう言う男子部員は嫌らしい笑みを浮かべている。



サッ

ド



自分の、もはやなんにも生えていない股にあてがわれた男根は太く、硬く屹立しておりこれから行われるであろう所業を容易に想起させる。
「そんなつもりで……マミに來たんじゃ……なくて……」

かすれ、震える声。

何だこの頼りないさえずりは。

自分の喉から出ているのか。

情けなくて涙が出そうになる。

目の前の男はもう、

自分が気持ちよくなる事しか

考えていない。

わかる。

自分がそうだったから。

今更後悔しても遅い。

その絶望感が自分の内側を満たしていく。



「じゃ、はじめるからな？」

「やめっ……や、やめろ！」

「心配すんなって。済んだらしばらくの間は
プールを女子部員貸し切りにしてやるからさ」
そう言いながら腰をがっちり掴まれる。

やばい。やられる。

「や、あ……いやっ……！」

か細い声が喉から出てくる。
怖くて力が入らない。







始まってしまった。
こうなったらもう止められる訳がない。
何の躊躇もなく入れやがって！

ナカに男根を打ち付けられる度、
内臓が押されてなまめかしい声が出してしまう。

くやしい。

今の自分は、声を押し殺しきる事も出来ないんだ。

これが悪夢なら早く終わってくれ……

ぽちゃっ

ぽちゃっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

しばらくして精を吐き出し、満足したのか
男子部員は何やら誤魔化すように
プールは使わせてやるだの何だの言いながら
立ち去って行った。

俺はすぐに立ち上がる気力も出ず、
その場で震えるばかりだった。



プールを使えるようになった、と
女子部に報告をしたが
本当にこれで良かったのだろうか？

えー？
本当に許可
とってきてくれたの？

やるじゃん！

ありがとー！
見直したよ



いやあ、まあさ、
俺もさ、一応女子部員として
活動させてもらってるわけだし？

これ位はね？

疑念を心の奥底に
押し込めて

「受け入れてもらえた」という
事に安堵をおぼえた



それからしばらくの間、
しっかり練習出来る日が続いた。

ん

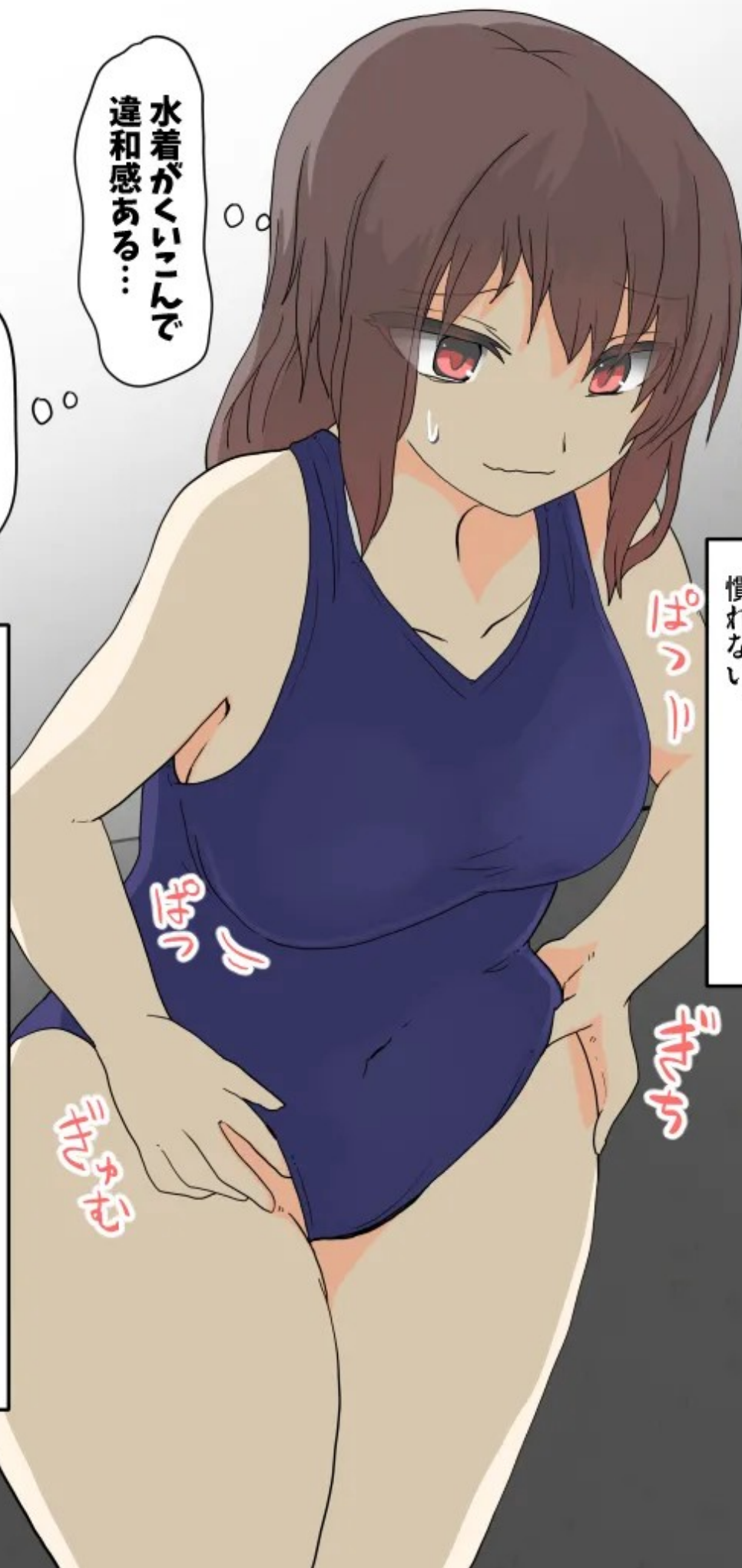
くっ…

周囲の視線や、男子生徒からの
『スキンシップ』にはいまだに
慣れない。

水着がくいこんで
違和感ある…

太った？
いやいや
無い無い無い

でも、男だった頃からやっていたスポーツを
頑張り続ける事で「男であった自分」と
まだ地続きで居られる。
そんな思いもあり、水泳は自分にとって救いだった。



ぽっり

ぽっ

ぎゅ

ぎゅむ

こうして女性用不着に乳が収まるたび、
密着感と違和感をおぼえて少しムズムズする。

男の時は当然パンツ部分しか不着が無かった。
全身タイプは男性用競泳不着でも
着ていれば少しはこの姿に慣れるのが
早かったのかと思うが、今更そんな事を
考えても遅い。

水着姿で男子生徒に見つかからないよう
気を付けてプールまで向かう。
泳いでいれば自分の姿を気にする事も無いし、
見られることもない。
水泳だけは自分を救ってくれる。



よっ！
今日もいい乳してんじゃん！

ひやっつり!!

くっくっ……!!
お前いい加減にしろよ!!
セクハラだぞ
犯罪なんだからな

見つかるぞ「コレ」だ。
だから嫌だったんだ。
男なんだから良いだろ、
とか言いながら平気で揉んでくる。

もにゅる

!

むにゅる



[illegible]

だからそんなら... ムネもまれても

きもひよくなん... っかあ... 無い、ん...♡

ハイそこ呂律まわって無い

カラダは正直で偉いぞ 見習え身体を

ぐしゅ

だ

A manga-style illustration of a young woman with long dark hair and red eyes, looking surprised or blushing while holding a large blue object. There are several speech bubbles around her containing Japanese text.

- Top right:** だからそんなら…ムネもまれても
- Middle right:** きもひよくなん…っかあつ…無い、ん…♡
- Bottom right:** ハイそこ呂律まわって無いカラダは正直で偉いぞ見習え身体を
- Left side:** めくめくめくめく
- Right side:** だろっ
- Bottom left:** さびるさびる

[illegible][illegible]

執拗な胸への愛撫に足が震える。
立っていられない！

「~~~~っ！」
たまらず床にへたりこんでしまう。

こんな……
性器でもない所を
弄られただけでこんなに
気持ちいいなんて。

これ以上やられたらマズい。
戻れない所まで
いつてしまう気がする。

ド

サッ



シズヘンミナ...

おいおい冗談だって

もしかして
イツちやった?

はーっ♡

はーっ♡

悪い悪い
部活頑張れよ!

幸い、今回はこれだけで解放された。
その日の練習は身にならず、
タイムも全く伸びなかった。

むにゅ♡
うん♡

もにゅ♡

きゅん♡

きゅん♡

ぐちゅ♡
ぐちゅ♡

「お前、ムネでかくなってきたね？」
「はあ？ いや、まあ……そういう病気だし……結構前からだろ？」



「そういうんじゃないかってさ
女になつたにしてもデカくなつてきてるつつうか……」

「気のせいだろ？ ほら、さつさと行なうぜ」

ある朝、登校するなり『胸が大きくなった』なんて言われた。
そんな筈ない。この身体になつてからしばらく変化は無かったし、
こいつがヘンに勘ぐってるだけに決まつてる。

「気のせいかな……なんかオナニーばかり
してるとかじゃねえの？」

「ほ？んなわけねーだろそんな事で大きくなるとか
バカじゃねえのほんとバカぜつたいバカ」

「わ、悪かったよ……」

「気のせいな、気のせい」

まったく変な事ばかり言っ
てきやがって。
風評被害もはなはだしい。

どこで聞いた情報だ。

何だ？アレか？ホルモンの量が増えて、とかそういう理論か？

そういう勘ぐりは実際に自慰ばかりしてほしいものだ。



やってた。

え……？
そんなに明らかに見て判る位
体型変わるとかある……？

んっ

んっ

ふんっ

ふんっ

くちゅ

くちゅ

くちゅ

性的な事はなるべく避けた方が
良いんだろうか。
止めたら胸も戻るのか……？
全然わからない。

こんな事、医者に聞くのとはばかられるし
女友達に聞いて「オナニーなんてした事ない」とか
「してはいるけど体型変わる程やるとかちよつと……」
なんて言われた日には立ち直れない気がする。

とりあえずしばらく止めにしよう。
そもそもやらなくてもいい事だったし。
ちよつと我慢するだけだ。問題ない。

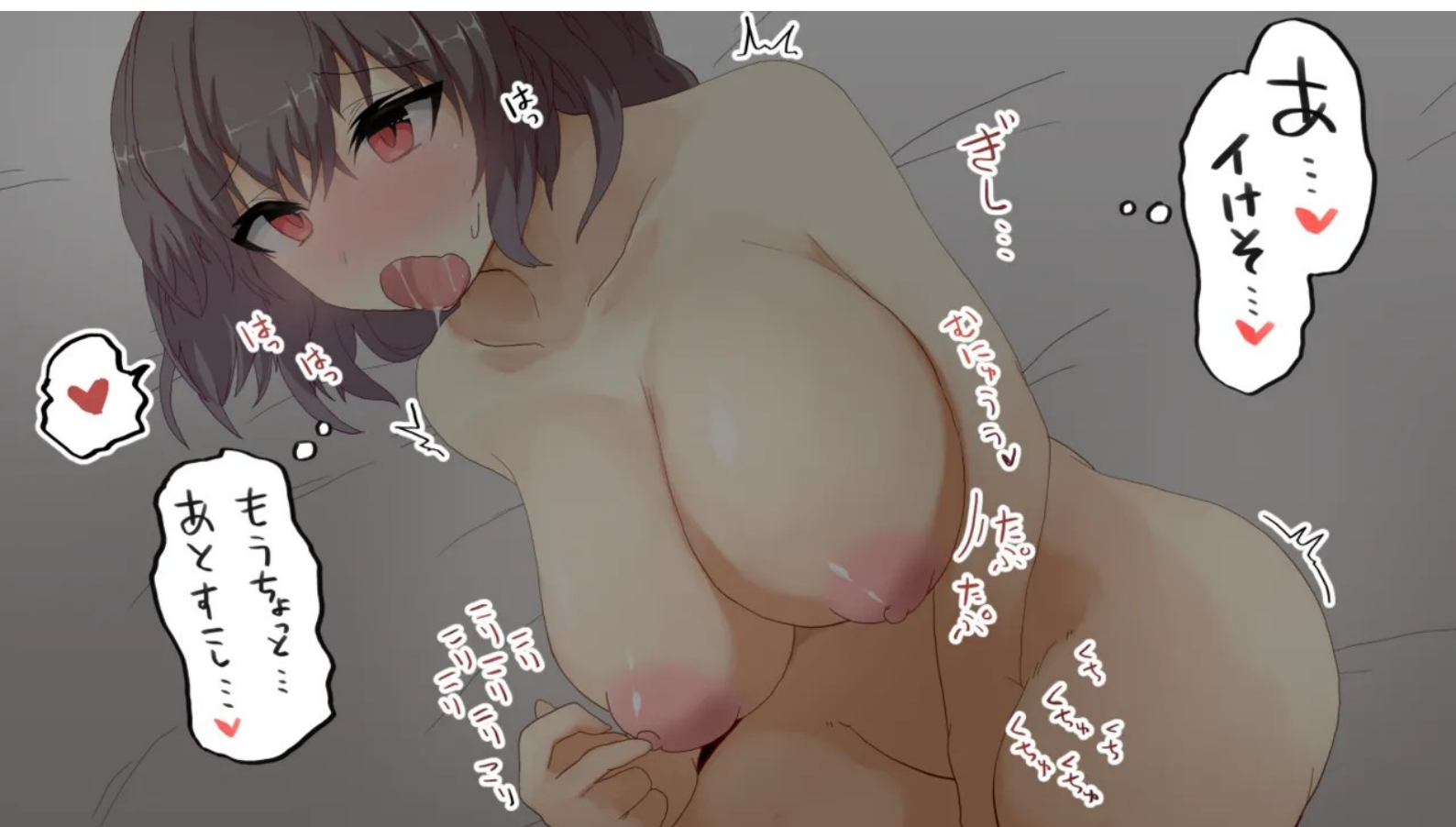


夜。
部屋の中に、女の押し殺した
声が小さく響く。

本当はこんな事をするのは
よくない筈なのに。
本当はこんな事をしているのが
バレたら終わってしまうに
違いはないのに。

時折こうして我慢できなくなり、
薄暗い部屋の中
ベッドの上で自慰をしてしまう。







……またやってしまった。
「しばらく止めにしよう」と
考えていたばかりだったのに。
絶頂を迎えた後でようやく
シャツが汗でぐっしょり
濡れている事に気付く。
パジャマを脱いだ所までは
良かったなとか
またお風呂入らなきゃ、
なんて火照る身体を
抱えながら考える。

……もしかして、
交渉しに行っただけで襲われた時の
ように、もう一度男とやったら。
今の女として熟れてきた
自分の肉体ならば
もっと気持ちよくなれるの
だろうか。
そんな気は毛頭ないが、
もしそうなら少し位は
いいかも知れないと
思えてくる。

同時に、そんな事を
考えてしまっている事自体が
不安を煽る。

自分は男で、いつか戻るんだ。
その気持ちだけは捨てたくない。

はっ♡

はっ♡

はぁ♡

なあ水谷
今日も男子部室来いよ

最近ちよくちよく
こうして誘われる。
断ってもよい筈なのだが、
それでまた女子部の練習時間が
減ってしまうのが怖い。

...

折角得た権利だ。手放すわけにはいかない。
自分が誘いに乗ってやっている間は練習時間も確保出来るし、
女子部の中にも居場所が貰える気がする。

じろじろとこちらのカラダを
舐めまわすように見てくる男子の
視線から逃れるように体を
よじりながら思案する。



…わかったよ
早めに済ませろよな

話が早いな
待ってるぜ

結局、今日もカラダを使って
権利を確保しにいく事になる。

ため息まじりの返答とは裏腹に、
必要とされている事に内心喜んでいる
自分が居た事に気付いて小さく首を振る。

好きでやりに行く
ワケじゃない。
まだ大丈夫。



まったく飽きもせずによくもまあ
こう毎日サカリ続けられるものだ。
自分も逆の立場だったら
同じ事をしていたらどうか？

考えても仕方がない。
ため息をつきながら裸になり、
今日の相手のちんちんを胸で挟み込む。



「いつの間にかこんなに
乳でっかくしやがって…
本当はお前も
楽しんでるんじゃないか？」

「そんなわけないだろ！
無駄口叩いてないでさっさと
出す事に集中しろよ」
これが済んだら気兼ねなくプールで練習できる。
その為に必要だからやってるだけ。
楽しんでるわけがない。

たふ、

たふ、



「……っ！」

ふう……あーすつきりした」



「やつりあ……ちよつ……」

出す時は言えつて言ってるだろ！

へんな所にかかったらどうすんだよ

まったく……」

髪にかかって固まったらと思うと

ぞつとする。勘弁してくれ。



おっ♡
はっ♡
はっ♡

段々

どっちが目的で
どっちが手段だったか

水谷最近調子悪いみたい
だけど大丈夫？

タイムも結構落ちてるし…

う、うん…
ちよつとね

ゴメン、この後
用事あるからこれで上がるね

わからなくなってくる

誘われるがままに
ついて行つて

おっ、来た来た
早くはじめようぜ

うん…

自分に言い訳を
しながら

今日も体を許す

うまい、うまい

んちやう、
んちやう

今日はコレ
使ってみようぜ

ええー！

ホントそういうの
好きだよな

お前もだろ

バカ言え

次第に

より強い快楽を
もためて

イッてる
からあ

イッてる

ん

んうう

イッ

んうう

んあ

「私」はどんどん
堕ちていく

がりがり

がりがり

グアイッ
グアイッ
グアイッ

びん

びん

そろそろ練習時間だったか

よし、じゃあ今日は電マ押し付け
耐久ゲームして終わっとくか

イッたら今使ってる水着そのままで
女子部帰って練習する罰ゲームな(笑)

はは……
ただ我慢するだけだろ？
楽勝楽勝

どうしよう……イッたら終わる
女子部の仲間に絶対バレちゃう
いや落ち着けイかなきやいいだけ
イッても隠しきれればいいだけ





はい一回目
いや早いわ(笑)
『待て』教えられたての犬でも
もうちょい耐えるだろ

ううう
は、はあ？
イッてねえしくすうたくて
声出ただけだし？

あ、そういう事言っちゃう？

ぽた
ぽた
ぽた



女モノ水着の日焼けつけて
っるっるの股間から
愛液垂れ流しておいてよく言うよな

うああ…っ

脱がすなっ
言うなあっ

身体も心もとっくにメスのくせに
意地ばっかり張りやがって

とろ～っ



あゝあ、素直に認めないから
生電マの刑になってしまったな

反省しろよ！
これはお前の事を思って
やってるんだからな！

んやっ

こゝろが
おぼろ

アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ



それから何度も何度も
イカされて

愛液と汗でぐじょぐじょに
なつた水着が全身に貼り付いて

俺シヨックだな〜…
水谷さんの事、結構
尊敬してたのに

はむ

あっ

ぐじょぐじょ♡

がっ

ぐじょぐじょ

もう上の空っぽいのに
まん肉はがんばって
電マくわえつつけてるじゃん

流石は元エース
鍛えられた下半身

ぐじょぐじょ♡

ぐじょぐじょ♡

イッ…

あっあっあっ

もう、とつくに戻れない所まで
堕ちてしまっていた事に気付いた

あーイイもん見れた
じゃ、水谷あとは
練習がんばってな

自分でも判る位
オシナのおいする…

練習サボッて
太ったら女子んこの
部長に睨まれるぞ

すん
すん

ほんとにコレ
そのまんまで行くのか？

うるせー

むしろ最近ほ痩せたわ
毎日毎日こんなコト
してんだから

ははっ悪い
水谷スゲー可愛いから
つい誘っちゃってさ

かわっ…!!

おー、正直男ん時より
今の方が話しやすいし
安心するわ

ふふふん…？
いや別に嬉しく
ねーけど？

あれ…？

でも

トコノコ

そっか…

今の「私」のカラダなら

あの…+

今日は練習なくしてさ、

えっち…しない？

水泳を無理に頑張らなくても
みてもらえるんだ…
❤

おしまい